2021 年 12 月 15 日 168 号 日本聖書神学校学報



# 日本聖書神学校 学 報

### Japan Biblical Theological Seminary

〒 161-0033 東京都新宿区下落合 3-14-16 · ☎ 03-3951-1101 ~ 2 · Email: jbts@jbts.ac.jp

2021年12月15日

第168号

発行人 神 保 望 【後援会献金口座】 郵便振替: 00110-3-6435 加入者名: 学校法人聖経学園 日本聖書神学校

2

3



### 【巻頭言】

### EATWOT の宣教学的再考

### 校 長 神保 望

### 今号の内容

巻頭言

全校修養会

感染予防に配慮した聖餐式

キリスト教研究所

の端緒は、アフリカの若者がベルギーのルーヴェンでラテ ンアメリカ人やアジア人との対話を通じて与えられた「ひ らめき」であったが、その当時の理解はヨーロッパ・北米 といった「第一世界」の神学に対峙するアジア・アフリカ・ ラテンアメリカといった「第三世界」において共通した抑 圧の状況と解放の闘いに見られる「共通性」であるとされ た。しかし、定期的に開催された第三世界神学者エキュメ ニカル協議会において対話を積み重ねることで浮き彫りに されたのは、「第三世界」においても共通点のみならず相 違点も多々あるとの事実である。このことについて、コー ンは次のように記している。「過去四回に亘る協議会によっ て確認されたのは、アフリカ人は土着化を強調し、アジア 人は宗教的多元主義を重視し、ラテンアメリカ人は階級分 析(class analysis)を強調するとの相違点であった。」そこ で今日における第三世界神学者エキュメニカル協議会にお ける主な関心事は、既述の通り「地理的空間に限定されな い概念」であることを積極的に認め合いつつ、所謂第一世 界との「二項対立」で捉えるのではなく、特に国家や経済 圏における分断線を超えて存在するマイノリティーに呼び かけ対話することによって、それぞれの相違点を認め合い つつも「福音の核心である解放」を共通する主題とし、「貧 しい人々」の中でこそ聖書を読み直す必要があるとの問題 意識を明確に持つことである。

コロナ禍をはじめ貧困や抑圧、社会的格差や差別というように、現代世界を分断するものは依然として数多く存在する。これらの問題は、どれも諸教会における今日的宣教の課題であろう。そこで「福音の核心である解放」を実現するには、嘗ての「第三世界」の名称に込められた地理的空間を超えた出会いと対話こそ必要なのである。御子の十字架の死と復活によって、神は罪人の贖いを成就された。それは罪の縄目からの解放としての福音であり、キリストは世の全ての分断線を超えて人々と出会い、神の国到来の宣教活動を全うされた。EATWOTによる人々との出会いと神学的対話においても、キリスト降誕によってもたらされた福音を常に核心に置いているのである。

海外留学時代のことであるが、ある日、担当教授から与えられた主題について授業の中で発表する機会が与えられたことがある。私に割り当てられた主題は、EATWOTであった。恥ずかしながら、それまでただの一度も聞いたことがなかったこの名称に、当時の私は戸惑いを隠せなかったのを、今でも鮮明に覚えている。

EATWOT とは、Ecumenical Association of Third-World Theologians の略称であり、邦訳すれば「第三世界神学者 エキュメニカル協議会」である。辞典によれば、第三世界 とはそもそもアジア・アフリカ・中南米等の「発展途上」 にある諸国を、東西両世界、或いは米ソ(ロシア)二大国 とこれに次ぐ先進諸国と対比した呼称であるが、EATWOT においては創設以来新たに加えられた世界各地域のマイノ リティーの存在によって「地理的空間に限定されない概念」 へと徐々に変化している。確かに、複雑化した現代世界の 政治や経済の状況に鑑みると、「第三世界」の呼称をもっ て国や地域を特定する試み自体が極めて困難であることは 間違いない事実である。そこで、第三世界神学者エキュメ ニカル協議会を理解する上で重要なのは、その創設につい て議論した世界教会協議会(WCC)ナイロビ総会が開催さ れた1975年当時の理解であろう。影響力が絶大なヨーロッ パや北米の神学に対して、それまでの歴史上貧しく周縁化 された人々の声なき声を代弁することを中心的関心事とし た点に存在意義を確認することが出来るからである。

「黒人解放の神学」で知られるジェームス・H・コーンは、1991年にWCC Publicationsから出版された辞典の中で、第三世界神学者エキュメニカル協議会について次のように紹介している。「ヨーロッパや北米の特権を有する人々によって形成された神学は、第三世界の貧しい人々の問題に対処するのには極めて不十分である。もしも全てのキリスト者に有用な信仰の神学的解釈があるとすれば、全ての人々の代表がその取り組みに参加しなければならない。」コーンが記したこの簡潔な言葉は、エキュメニカル運動の本質を教えていると同時に、その困難さをも示唆しているのではないか。第三世界神学者エキュメニカル協議会創設

日本聖書神学校学報 168号 2021年12月15日

## 全校修養会

### 教授 稲垣千世

10月29日(金)と30日(土)の2日間、日本聖書神学校の全校修養会が「テクノロジーと教会共同体一身体性の問題をめぐって」というテーマのもとに開催された。

世界中に拡大し猛威を振るっている新型コロナウィルスの感染拡大は、私たちの健康状態ばかりでなく私たちの社会生活のあり方にも大きな影響を及ぼしている。人々が集まることは感染予防のために極力控えなければならないという状況が続いている。今までのように直接集まってコミュニケーションをとることが非に困難になり、その代わりとしてオンラインによるコミュニケーション手段が急速に普及したのがコロナ禍の中のこの2年間であった。この状況下にある教会を財できた。オンラインによる礼拝が急速

に広まり、これまでの礼拝のあり方とは 異なる形態の礼拝が現れた。人々が一定 の時間一定の場所に共に集うことによっ て守られてきた対面での礼拝が、オンラ イン礼拝の出現によってその制約が取り 払われることとなった。オンラインによ る仮想空間での礼拝が可能になったので ある。この現実は私たちに礼拝に共に集 うことの意味を改めて考えさせる機会を もたらした。このような問題意識をもっ て私たちは全校修養会を開催した。

1日目はフィリピンのシリマン大学神学部の zoom 礼拝に私たちは日本から参加した。フィリピンと日本。しかも、それぞれが自分の場所から参加した礼拝だった。礼拝後はシリマン大学神学部学部長で牧師でもある、ジェネス・ハリス・フェーラー博士の講演を聞いた。テーマは「未来を覗き込む:黙想―日本聖書神学校とシリマン大学神学部の仮想空間の

集いのために一」であった。講演の後の質疑応答を通して、オンライン礼拝の実施によって見えてきた新たな課題を共有することができた。2日目は日本聖書神学校に共に集い、対面での礼拝を捧げた後、3つのグループに分かれてワークショップを行った。荒瀬教授担当の「『遠隔』礼拝における共同性」、菅原教授担当の「パウロ(と偽パウロ?)におけるキリストの体」、古谷教授担当の「教会共同体の可能性一教区の事例から」の3つのグループであった。その後の全体会において、それぞれのグループで話し合われた内容の分かち合いが行われた。

この2日間の学びを通して、私たちは 科学技術の進歩によってコミュニケー ションの手段が多様化していく現代社会 の中にある教会活動の本質について共に 考える機会を得た。

### 3 年 小川和孝

今回の修養会は昨年からのコロナ禍の 中で企画され、日本では10月25日に緊 急事態宣言が解除された中でも、日本聖 書神学校では一部リモートによる授業が 行われているの中での開催となりました。 今回の修養会は、コロナ禍の中で、「禍を 福となす」を文字通り修養会の中にリモー トを取り入れ、フィリピンのシリマン大 学神学部とのリモートによる合同礼拝を 開会礼拝として行うことができました。 合同礼拝では、シリマン大学と日本聖書 神学校で英語と日本語による讃美歌を捧 げる交わりが行われました。Dr.Jeaneth. H.Faller による、コロナ禍のなかで合同の 礼拝を捧げられることへの感謝のショー トメッセージが語られました。

礼拝後には、シリマン大学の Dr.Jeaneth. H.Faller から、リモート授業の状況、大学側のテクノロジーによるリモートの準備に新しい知識を持っている技術者を与えられたこと、学生も大学側のリモート環境に適切に対応している状況をうかがうことができました。Dr.Jeaneth.H.Faller のお話の後、シリマン大学と日本聖書神学校の先生方と学生たちの意見交換を行うことが出来ました。シリマン大学では、リモート授業はうまくいっているが、学生間の交流が持ちにくいこと、週2回捧げられていた礼拝が週に水曜日の1回になり、学生はリ

Japan Biblical Theological Seminary - Silliman University Divinity School Joint Virtual Worship and Fellowship; October 29, 2021



モートでの参加で、聖歌隊の奉仕をしている学生間の聖歌を通しての交流がもてないことなどがあげられました。オンライン聖餐についての質問については、Dr.Noriel Capulong より物素については、家の年長役(者)が牧師の聖別のタイミングと一緒に上に挙げて、自宅のものを聖別されるので、聖餐を行えるとの報告。「リモートでの聖餐について議論は起きなかったのか?」について、深刻な討論や疑問はなかったが、最善の方法ではないことを皆分かっていて、一時的な措置であることを皆分かっているとのこと。Dr.Jeaneth. H.Faller より、オンラインでやっていることについて、大きな問題は起こっていな

いとのこと。聖餐についても、神学的な 反対も起きなかったとのこと。

修養会二日目は、1)「遠隔」礼拝における共同体性。2)パウロ(と偽パウロ?)におけるキリストの体。3)教会共同体の可能性・・・教区の事例から。3つのグループのワークショップに分かれ、それぞれのグループで担当教授のもと、活発な意見交換がもたれました。

各グループの報告より、共通している メリットは、教会へ来ることのできなかっ た教会員の方々へ、紙による説教配信が 行われるようになり、リモートでのライ ブ配信なども行われるようになったこと、

(4面へ続く)

2021 年 12 月 15 日 168 号 日本聖書神学校学報

### 「感染予防に配慮した聖餐式」実施例について 教 授 柳下明子



新型コロナウィルス感染症の影響のも とに置かれたこの一年半、各個教会では 礼拝の持ち方、集会の在り方などについ て議論を重ねてこられたことと思います。 なかでも、聖餐式についての見解は教会 の規模や立地、神学的背景により、多様 な意見が存在したことと思います。その 間に「オンラインでの聖餐式」であったり、 「個包装のウエハース(注:ホスチアのこ と)とポーションによる聖餐式」であっ たりする聖餐式の実践が、急速に日本の 教会にも紹介されました。これらの聖餐 式実践について、神学的な検討をする以 前に現実の前に教会が立たされてしまう、 という事がこの期間に起こったことでは なかったでしょうか。

神学校では 2020 年 10 月の全校修養会 を「感染症と教会」のテーマのもとに開催し、そこでグループごとにテーマの異なるワークショップを持ちましたが、一

つのグループのテーマは「感染予防に配慮した聖餐式づくり」というものでした。そこで確認されたことは、感染予防の観点から比較的安心な形で、また従来の聖餐式の在り方から大きく逸脱することなく聖餐式を執行することは理論上可能であること、そして同時にそれにもかかわらず礼拝者にとってそれがすなわち「安心」を意味するものではなく、教会が聖餐式を執行するのであれば、合意形成が重要であることなどでありました(学報165号に詳しく報告されています)。

神学校では新型コロナ感染症の問題に立たされるより前は、4月の入学礼拝と、9月の後期始業礼拝において聖餐式を執行していました。新型コロナ感染症の拡大以降、感染予防の観点から聖餐式は執り行われていません。

ここ数年3年生の礼拝学クラスの受講生によって、その学びの仕上げとして神学校礼拝を礼拝学クラスがデザインするという事を行っています。その日の礼拝の主題を決め、礼拝順序のすべてをクラスで話し合って決めます。その礼拝において学生からは、2020年の研修会での学びを生かして聖餐式の執行をしたい、またその日の礼

拝の主題を「一致・希望・平和」としたい という希望が出されました。

7月19日の礼拝当日は、聖餐式のためのパン裂き用のパン、陪餐用のパンの切り分け、そして分餐用の容器へのジュース配りなどは司式担当者が一人で行い、当日陪餐にあずかることを希望しない者には祝福を行うための司式補助を立てるなどしました。

以下に準備に携わった学生の報告を転載します。また、付録の注意事項、当日 同線の図表も3年生の作成したものです。

神学校での実践が、諸教会の礼拝実践 の一助になれば幸いです。

### 振り返り 3年 湊 理恵

3年生が神学校の金曜礼拝をデザインするにあたって、礼拝のテーマ、礼拝の内容、聖書箇所などについて、礼拝学の授業の中で一人一人発表することが求められました。発表の結果、コロナ禍で礼拝堂での礼拝や聖餐式が中止になっている状況を踏まえたものが、いくつか出されました。そして、各実習教会や所属教会の礼拝、聖餐式の現状を報告しあった後、テーマを「一致・希望・平和として聖餐」

#### 聖餐礼拝の感染リスク分析と対策

礼拝学クラス受講生(三年生)作成 堀成美神学生(感染症対策コンサルタント)監修

	「現代では、日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日			
	行動・人	感染リスク	対策	備考
1	聖餐準備(パン、ぶどう液)	調理場所(校舎2階)・道具が清潔か	通常の衛生管理(まな板包丁消毒)	
			人数を限る、不織布マスク着用、石鹸手	
		調理後のパン・ぶどう液の保管中に誰かが触れな	洗い/ペーパータオル	
		いか	調理室で保管、ふた、ラップしている。	
2	礼拝堂への集合、受付(出席簿記	外からのウィルス持ち込み	・マスク着用・手指消毒	不織布マスクを推
	名、式次第受け取り)	マスクをしない対面の会話、物を媒介に手にウィ	出席簿丸付けし、自分で式次第と聖書を	奨。忘れた人用に
	参加者全員	ルス付着	取る。	受付に置くか。
3	開始五分前にナルテックスで待機		基本的に時間が短い(10 分以内)	ドア開放のまま
	し、前奏にあわせて入堂		入り口を開けて換気をする	
	参加者全員		入堂方法を図示し、口頭で手短に説明	
4	着席、礼拝(賛美、聖書朗読、祈り)	司式者の飛沫	マスク着用、会衆座席までの距離をとる	ここは普段通り
	司式、祈祷者、会衆	聖書朗読時の飛沫	マスク着用、マイク使用	ワイヤレス 2 本
		賛美事の飛沫	マスク着用、席の間隔をあける	
5-1	<聖餐>制定語、パン裂き	パンへの飛沫付着	マスク着用、パン裂のパンは食さない	パン裂き用のパン
5-2	分餐 パン:1名 杯2名	パンの受け渡しの際の接触	受領者は列に並ぶ前に手指消毒	消毒液 4 箇所
	中央でパンを受け、食した後に左		分餐者はトングでパンを手のひらに置く*	トング1つ(予備1
	右に分かれて杯を受け取り飲ん	受領者がマスクを外している際の分餐者の発語	受領者は受け取って、一歩横にずれてマ	落とした時用に)
	で、杯を回収用のトレーに置く		スクを外し食す、マスクを戻し杯をうけと	使用後の杯の回収
		杯を取る際に他の杯に触れる	る。杯は間隔を開けてトレーに置く	トレー2つ
		移動時のマスクを外している人とのすれ違い	一方通行の流れを	
6	退堂	ナルテックスの三密	ナルテックスに留まらない	
7	聖餐後片付け	杯の回収時にウィルス付着	回収し洗剤で洗浄全て終わったら手洗い	バケツ用意

日本聖書神学校学報 168 号 2021 年 12 月 15 日

として聖餐式を行うことに決めました。

感染予防については、昨年度の全校修 養会のワークショップ「感染予防に配慮 した聖餐式づくり」で話し合われたこ とを基にしました。そのときのワーク ショップでは、飛沫感染を防ぐという観 点で、マスクを着用し距離をとる、手指 消毒の徹底、体調不良の人は参加を見送 ることが基本事項として確認されていま した。その上で、礼拝での人の行動を細 かく分割して、そこにあるリスクを洗い 出し、対策を講じることを机上でシミュ レーションしました。さらに、配餐にト ングを使う、パンと杯をいただくときだ けマスクをはずし、その後はすぐにマス クを着ける、司式者が裂くパンと陪席者 が食するパンは別にするなどのアドバイ スも出されていました。(これらのアドバ イスは、今回実施しました。)

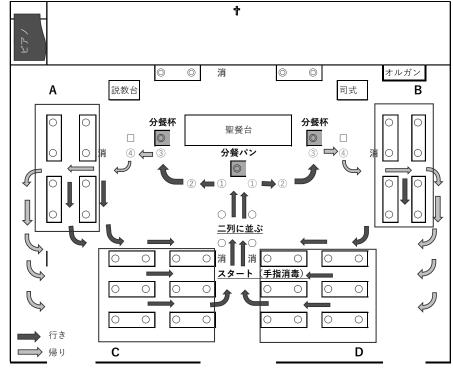
まず、今回は配餐ではなく、会衆が前に進み出てパンを受け取ってその場で食し、隣に移動して杯を受け取り飲んだ後、席に戻るという形を考えました。

そして、前年のワークショップの学びを踏まえて、今回は聖餐準備から聖餐後の後片付けまでの行動を7つの場面に分け、それに対する感染リスクと対策を考えて表にまとめ、感染症対策コンサルタントの堀成美神学生に監修をお願いしました。それから、礼拝堂内で密になることを避けるため、座席の間隔をとる、一

方向に移動する、人の流れが停滞しないようにすることを配慮して動線を定めました。具体的には、①礼拝前に出席者に動きの概要を伝える、②座席に聖書物語の絵のコピーを貼っておくことで間隔をとる、③分餐の前後に手指消毒をするために動線上の複数箇所に消毒液を置く、

⑤分餐でパンは1か所、杯は2か所にする等としました。

神学生の希望から始まった神学校での 聖餐式でしたが、全校修養会のワーク ショップの検証の場ともなりました。聖 餐式を執り行っていただいた先生方に感 謝いたします。



- 1. ブロックA,B席が先,次にブロックC,D席の前列から順に中央に二列に並んで聖餐に与ります。
- 2. 列は長くならないよう、三人 x 二列までとします。まず消毒液で手指を消毒してください。
- 3. ①マスクを着用のままパンを手のひらに受け取り、横②にずれてからマスクを外し食します。
- 4. マスクを付けてから③に進み出て杯を自分で一つ取り、横④にずれてマスクを外し杯を飲みます。
- 5. 目の前のトレーに空いた杯を置き、マスクを着用して消毒液で手指を消毒してから席に戻ります。

### キリスト教研究所紀要『聖書と神学』第 33 号 投稿募集

『聖書と神学』第33号は、2022年10月発行予定です。特集は「信仰と身体」です。コロナ禍により礼拝や食事、種々の交わりが制限される経験をしている教会にとって、信仰における身体の意味は何か、身体性は不変なのか変化していくのか、といったことが神学的課題となっています。このような時にあたり、「からだ」の理解を深めたいと願っています。所員・会員の投稿をお待ちしております。また、33号より、学術論文の体裁をとる必要のない「宣教報告・神学黙想」も募集します。これについては査読による審査はありません。宣教の現場からの考察を期待します。締め切りは5月末日です。「投稿要領」を研究所のアドレス (institute@jbts.ac.jp) にご請求ください。

『聖書と神学』は研究所所員・会員に配布されます。本校卒業生はどなたも会員となれます。年会費 1000 円。入会申し込みはメール・ファックスで神学校総務部まで。

(所長 荒瀬牧彦)

### 献金によって神学校は支えられています

日本聖書神学校の牧師養成の業は、全国の諸教会と多くの信徒の方々の献金によって大きなサポートをいただいています。その献金は将来教会に仕える神学生の奨学金となって、神学生の勉学を支えています。日本の宣教のための業にどうかお祈りとお支えを賜りたくお願い申し上げます。

郵便振替:00110-3-6435(後援会献金口座) 加入者名:学校法人聖経学園日本聖書神学校

### 2022 年度春期入学試験

#### ★出願期間

2022年1月7日(金)~31日(月) ★試験日

2022年2月17日(木)~18日(金)

#### ★受験資格

- 1. 大学卒業者またはそれと同等の学力を有すると本校において認められた者。
- 2. 受洗後2ヶ年以上の忠実な教会員であり、伝道の 召命を受け、所属教会牧師と役員会の推薦する者 であること。

#### (2面から続く)

デメリットとして、教会員の間での交流 が出来ない事があげられている。各グルー プの報告から、1)グループでは、教会に 行きたくてもいかれない人たちについて、 ハイブリッドなど、霊性を失わずに、あ り方を模索していかれたら良いとの事。2) グループでは、キリストの体としての教 会の肢体と全体性について、そして、コ ロナが通りすぎた後に、教会へ来ないで リモート礼拝の継続の必要な方など、新 しい全体性として教会の働きの回復につ いても考えることが大事であること。3) グループでは、教会により献金が思うよ うに集まらなかった教会や振り込みで献 金をしていただき、予想を上回る額になっ た教会もあったこと。ユーチューブ礼拝 によって会員以外の方の問いあわせが増 え、喜びであるとともにトラブルに注意 が必要なこと。教会として、オンライン 礼拝が普及しているが教団として検討さ れていないとのこと。などが大事なとこ ろと思われました。